

古典 29 虚弱で栄養不良の幼児

5 歳。彼は虚弱で栄養不良の幼児であり、2 歳まで稀な病気に罹っていた。

彼はそれで不機嫌になり、食欲は衰えた。

彼は前頭の頭痛を訴え、ウェストに痛みがあった。

睡眠によって吐き気がひとしきり続くことがあり、時々何時間も続いた。

体中をつつくが、発疹はない。

遠方の街に住んでいて、彼のお母さんは貧しくて彼をシカゴに連れてくることができなかったの、私は彼女の手紙に頼るしかなく、そして確かにその記録は不十分なものだった。

ひょっとしたらその時彼は Aethusa をとるべきだったのかもしれない。

小児科医は膀胱炎と診断し、彼の治療によってその子は腎臓の症状に関しては改善したが、胆汁性の発作が繰り返し起こり続けた。

母親の最初の手紙の日付は 1925 年 8 月 10 日だった。

母親は次のような症状を話した：

「頭痛と食べ物の嘔吐が頻繁におこり不機嫌だった。

食欲がなく、甘いものと味の濃い食べ物を欲する。

もし食べることを強要すると吐き気を催す。

歯は白亜質で腐食しやすい。

肥大した扁桃とアデノイド。

麦粒腫（ものもらい）を頻繁に繰り返す。

夜寝小便をもらし、日中はトイレに行く途中、いくらか小便をもらすことが頻繁にある。

包皮に赤みと炎症がある（専門家は包皮切除を勧めたがなされなかった）。

不機嫌で、ふくれていて、忘れっぽい。膝胸位で寝る。

Rx 1M.

レメディーをとったほぼ最初の日から改善が始まった。